2013年 新春対談

テーマ

# 羽曳野市における観光振興のあり方について

## ～ 歴史、自然、特産品を活かした交流と賑わいの創出 ～

出席者

**北川 嗣雄**
羽曳野市長

**黒川 健三**
羽曳野市商工会会長

**小田 敏朗**
羽曳野市議会議長
羽曳野ライオンズクラブ会長

**辰巳 浅嗣**
阪南大学学長

**山本 正明**
羽曳野ロータリークラブ会長

**岩川 洋成**
一般社団法人 共同通信社大阪支社 文化部長

司　会

**西迫 登**
公益財団法人 大阪観光コンベンション協会
マーケティング担当総括部長

会場協力 フレンチレストラン いちぢくの花
誉田 3-15-30 石橋ビル B1

**（西迫部長）**

本日のコーディネーター役の西迫です。観光という分野を初めて大きく取り扱うと伺いました。「観光」という言葉がもつ意味合いは、自然・文化を訪ね歩く狭義の「旅」から、より幅の広い意味合いをもつ言葉へと、時代の流れと共に変化してきました。今日は、産官学の各界からお集まり頂いた皆様方に「観光」をテーマにご対談頂き、歴史、自然、特産品等、豊富な観光資源をもつ羽曳野市の、さらなる賑わい創出のヒントを探ってみたいと思います。

**（北川市長）**

観光の在り方を具体化し、観光資源を活かした交流と賑わいの創出を推し進めていきたい。かつてはぶどう（デラウエア）の生産高日本一を誇った大阪府。その生産の柱となったのが本市であった。しかし、後継者がいないなどの問題から現在は休耕地が増えています。現在、就労者人口の６割以上が市外で勤務しています。しかし、平成 19 年に整備した道の駅で働く方々は羽曳野市に住んでいる方が大半だと聞いています。そして、「道の駅」に続く、２番目、３番目の観光スポットを育んでいきたい。販売が出来る市場を生み出すことが、農業離れの歯止めとなり、また、雇用の促進につながっていくと確信しております。

**（黒川会長）**

観光協会の取り組みとしては、特産品などのＰＲとその需要拡大を図っています。地元のいちじくを使用した「いちじくジャム」の生産販売は好評で昨年は約 2,000 個を販売いたしました。他にも地元のワインやいちじくを使用したソースやドレッシングなどを次々と生み出しています。今後も新たな特産品の開発などで皆さんにＰＲをと考えています。また、道の駅では、国柄の里（吉野箸）、亀山のお茶やローソクなども販売して相互交流を行っています。さらに、昨年８月には阪南大学、フィールドミュージアムトーク史遊会と協力し、スマートフォン用の観光アプリ「みささぎナビ」を立ち上げました。同ナビは世界文化遺産登録を目指す古市古墳群の情報などが簡単に検索できる便利な携帯サイトです。また、レンタサイクル事業を、古市、上ノ太子、高鷲の３つの駅で行っており、「みささぎナビ」と組み合わせて、散策を楽しんでいただけます。

**（西迫部長）**

市と観光協会それぞれのお立場から、羽曳野市の賑わい創りへの取り組み状況についてお話いただきました。続きまして本年敷設 1400 年を迎える竹内街道。および、平成 27 年の世界文化遺産登録を目標として取り組んでいる古市古墳群の活用などについてご意見をいただきたいと思います。

**（北川市長）**

市内には近鉄南大阪線五駅があり、昨年は古市駅と駒ヶ谷駅の隣に、羽曳野の「観光」の素敵な玄関口となるように公園などを整備しました。世界文化遺産の登録、竹内街道敷設 1400 年、特産品販売などを通して、多くの人々に喜ばれるような「観光」を生み出し、観光からの雇用の創出を目指したい。我々が今後の世界文化遺産の登録に向け、取り組んでいく中で、古墳群のバッファゾーンをどのよ

うに整備していくかが一番の課題であると思っています。史跡などに管理棟を設置することもバッファゾーンの一つという考え方のもと、観る、聞く、知ることができるようなガイダンス施設の整備をすすめていきます。

**（小田議長）**

堺・藤井寺・羽曳野が百舌鳥・古市古墳群の世界文化遺産登録に向けて、広域的な取り組みを進めています。広域を視野に入れるのであれば、古墳時代にとらわれず、近隣にある他の史跡や観光資源などでも、連携を進めることが重要だと思います。竹内街道につきましても、1400年の歴史を持っています。この大道は大阪府と奈良県をまたいだ10市町村でつながっています。現代と交通事情の差はあるものの広域連携は観光にとって欠かせないポイントであると思います。

**（山本会長）**

賑わいのある街づくりのひとつとして、観光事業の拡大発展は欠かせません。「日本最古の官道」である竹内街道といえば、各時代の流通に欠かせないルートであり、この地域の人々の暮らしに根付いてきたものです。そこで、平凡かもわかりませんが「時代まつり」のようなイベントを企画して、背景に各時代の姿を入れ込んでいく。それを、毎年積み重ねて充実化していけば、奥の深いイベントができるんじゃないかと思います。京都や奈良では素晴らしいお祭りがたくさんあります。そのようなものが、羽曳野の中核として発展していけば良いなと思います。

**（辰巳学長）**

我々は、国際観光講座として「世界遺産を目指す百舌鳥・古市古墳群の魅力」というテーマで、シンポジウムや公開講座を開いています。また、「みささぎナビ」でスマートフォンでの観光案内をはじめると、学生がいろいろと協力し参加してくれました。観光という分野は若い力を無視することは出来ません。本当に学生の力に期待しております。今回、古墳群の情報を立ち上げる際にも、単なる古墳案内だけではなくて、障がい者の方にトイレの情報をお伝えするとか、防災情報など多様な情報を織り込むことになりました。そういったアイデアを出してくれたり、そこに学生も実際に活動へ参加してくれることが、非常に意味のあることだと思います。

**（岩川部長）**

「大阪アースダイバー（中沢 新一 著／講談社）」という本があります。この本では古墳時代より以前にさかのぼった地図が掲載され、地図によると古市は昔、海に面した断崖絶壁みたいなところにあったのではと記されている。そういう情景を思い浮かべると古墳群が聖地として生まれるというのは心情としてなるほどと感じます。今日、近鉄線で来ましたが、その当時の岬沿いに近鉄の線路が通っている。その歴史を知っていれば、近鉄電車に乗るだけでも、歴史的な体験が充分できる。「昔ここは海だったことや、古代人の気分になって古墳群がなぜここに作られたのか」という気持ちを持ってもらえたらよいと思います。竹内街道を通って奈良の都へ向かう際に、中国からの使いが港に入ってきたとき、石が飾りつけられた古市古墳群が太陽の光でピカピカに輝いて見えたはずです。それは大陸から来た使者に、国の威信を見せつけるには、素晴らしい演出だったと思います。いかにドラマがそこにあるか、必ずしも観光客を集めるというだけでなくて、地元の方にもどんなドラマがあるのかをわかりやすく伝えることが活気につながると思います。

**（黒川会長）**

竹内街道や古市古墳群は世界に発信できる観光資産。よって、峰塚公園や茶山グラウンドの管理棟の音声ガイダンスは多言語での活用も視野に入れるべきだと思います。管理棟が休憩所、

案内所、資料提供の場として活用できれば効率的。商工会において羽曳野街歩きを実施していまして、史跡を巡りながら、地域の特産品フェアや市内の加工品等の工場の見学などを行っております。世界に誇れる遺産をより多くの方に売り出すことによって、住んでよかった、住んでみたい、訪れてみたいとの思いをもってもらえる取り組みを行っていきたい。そういったことを実現していきたいと思っています。

**（西迫部長）**

つづきまして、羽曳野市の歴史・自然・特産品を活かした交流と賑わいの創出を進めていくための、今後の観光事業への取組み、観光振興のあり方についてのお話を聞かせていただきたいと思います。

**（小田議長）**

障がいのある方への配慮として、多目的トイレを設置するなど、羽曳野へ訪れてもらうために、できることはすべてやっていこうという考えは非常に大事。賛同いただける企業などにご協力いただき玄関先にシールを張って、「観光客にトイレを使っていただいていいですよシール」の明示などは、市が進めていく観光行政への意識づけや市民協働にもつながるのではないでしょうか。ハードとソフトの両面で取り組んでいかないといけない。目に見えるものも大事です（ハード）。一方、ソフトというのは市民のおもてなしの心。よく言われてますけど、来ていただいた方々に「本当に羽曳野は良かった。素晴らしかった。楽しかった」という思いを持って帰っていただける。そのような「おもてなしの心」を皆さんの心の中に醸成させていけたらと思っています。

**（山本会長）**

確かに羽曳野に在住の皆さんには地元のことをもっと良く知っていただきたいと思います。市内の観光資源は、多くの方々に知られていない有益なものが沢山あります。例えば、新古今和歌集が刻まれた石碑が近くに建つ「月読橋」、場所や由来など知らない人が多いと思います。また、源氏・平家のきらびやかなドラマがいくつかありますが、羽曳野にある源氏三代の墓などはほとんど取り上げられることがありません。当地に住む方々にも周知されていないような気がします。まず、市民にＰＲを進めることで、口コミで順番に市内から市外、国内から国外へと広がっていくのではないか。そんな期待感を持っています。また、マスコミ・通信ネットワークなど情報の発信方法について考えながら進めていくことが必要です。さらに、農・特産品について、最近は高級品だけでなく、Ｂ級やＣ級なども注目されています。自信を持って企画を立て生産者・団体・企業などが進められることを期待します。

歴史遺産の宝庫 羽曳野「時代まつり」のようなイベントをメインにして、年間を通して個々に盛り上げ、発信していけば先が見えて来るものと思います。

**（黒川会長）**

市の西から東に延びる竹内街道はおよそ 8.6Km。距離は長いですがスタンプラリーなどを実施してみたい。また、世界文化遺産登録に向けてシンボルマークが出来ています。そのシールを特産品のラベルなどに貼り付け、世界文化遺産登録の機運の醸成を図りたい。いろいろ長いスパンで考えていければ良いと思います。また古墳のまわりに空き地などがありますが、花を植えてみるのはいかがでしょうか。御陵が好きな方は幾度となく訪れますが、多くの方は１度見れば満足なのではないでしょうか。寺社仏閣などでも四季折々の花を鑑賞にこられる方は大勢いらっしゃいます。古墳の周辺に花を植えることで、四季折々に訪れるリピーターが増えるのではないでしょうか。

**（岩川部長）**

観光を活用した「地域おこし」が多くの自治体などで行われ、リピーターの獲得が重要なポイントといわれています。紅葉を見ることで有名なある地域では、国の補助金などで、施設を

次々と整備し観光客が増えた。しかし地元民は観光客は増えたが、道が狭いためひどい渋滞に悩まされています。その状況は外部から見ていて疑問に思う。まあ正反対なのかわかりませんが、東京の下町に「谷根千（やねせん）」といわれる地域があります。谷中・根津・千駄木は文京区と台東区にまたがる地域です。その呼び名は、森まゆみさんというライターが地域振興を目的に各頭文字をとって、「谷根千」と名づけて地域雑誌を発刊。「谷根千」は下町文化を持っており、職人さん達の世界や、ものすごく複雑な路地に美しく住環境を整えていることなどが注目され、共感した若い人たちが移り住むようになった。土地に愛着をわかせることで人が集まるという例もあります。地元の良いところを理解し、どのくらい愛着を持ってくれているのかという考え方が大事なことではないでしょうか。

**（辰巳学長）**

郷土に愛着を持ってもらうことは大事。ひとつの例ですが、河内長野で小学５年の児童 140 人が畠山軍、国際観光学部学生約 120 人の学生が三好軍となり「山城の合戦」を繰り広げました。最後は大学生が負けるストーリーになっているのですが、若いエネルギーが結集して発する熱気はたいへん貴重。また若い世代が歴史を学んでいただけるチャンス。合戦は大人から見れば遊びのように思えますが、実際にはその街の歴史などを学ぶことのできる良い機会です。軽トラ市は県外では盛んに実施されていますが、大阪では羽曳野がはじめての試みですね。今は農産物を中心に物産展的な軽トラが並んでいると思いますが、他の町では軽トラックの狭い荷台で若者がフォークソングを歌ったりしている所もあります。販売だけではなく、トラック上でいろいろな試みができるのであれば、分野も幅広くなり、魅力が広がり、学生でも楽しく参加できるのではないでしょうか。日頃、学生と過ごしている我々が、共にできることを続けていきたいという思いからの提案です。

**（西迫部長）**

皆様、ありがとうございました。この機会に私の立場からも一言申し上げます。昨年九月に函館のイベントで大阪産の出展として「鼓（ツヅミ）ソース」を販売しました。近くのブースでは「鼓ソース」を使ったお好み焼きも販売。このお好みを食べていたお客様から「このソースはどこのソース？」と質問が相次ぎ、鼓ソースがあっという間に売り切れてしまいました。これは何を申し上げたいかというと、「観光資源の情報を広く発信し、認知してもらうことの大切さを改めて知らされた」ということです。今後、観光に携わっている皆様には、情報発信・ＰＲが職務のひとつである我々の組織をどんどんご利用頂き、羽曳野市がさらに発展するよう共に進めていきたいと考えます。最後に市長よろしくお願いします。

**（北川市長）**

ご提言、ご意見ありがとうございます。観光を本市だけではなく、広域で進めることに同感です。1400 年を迎える竹内街道のイベントは隣接する自治体同士が連携をとりながら進めていくことが必要であり、ニーズに応えるような広域化を図っていくべきです。

また、軽トラ市は農産物販売だけでなく、若者が参加し、工夫を加えることで斬新なアイデアが生まれ、画期的なイベントへとランクアップします。

「観光資源そのものが、本当に地元に理解いただいている内容であることも重要」とのお話もいただきました。その観光が地元の人々にとって喜ばしいことなのか、喜んでいただいているのかを確認することは我々の役目。地元の皆様や子どもたちにとっても、誇りに思えるような「ドラマ」があれば魅力が増します。日本最古のドラマとして「白鳥伝説」のお話があります。「ヤマトタケル伝説」も活かしたい。古市駅の東側に白鳥神社さん、新しく整備した公園、そして、街道が走っています。そこでなにか「ドラマ」を絡めたイベントを実施してはと、自身で構想中です。実現の際は、ぜひ、ご協力お願いします。

「観光」が市の賑わいや雇用の創出に結びつくよう積極的に進めてまいります。結びに皆様にとって、本年が素晴らしい飛躍の年になりますよう、お祈り申し上げます。

本日はどうもありがとうございました。